Создавая родину на чужбине : от Кёнигсберга к Калининграду
(Creating a Homeland in a Foreign Land: From Königsberg to Kaliningrad)

by **Юрий Костяшов** (Yury Kostyashov)

Copyright © 2019 by Yury Kostyashov

Originally written in Russian and
first published 2019
as the Japanese edition
by Iwanami Shoten, Publishers, Tokyo
by arrangement with the Author.

はじめに

第二次世界大戦はヨーロッパの地図を塗り変えた。一九四五年以降、ポツダム会談の決定によりその一部がソ連に編入された時から、ドイツ辺境のとあるひとつの州でも新たな時間を刻み始めた。東プロイセンが西部ロシアとなり、ケーニヒスベルクがカリーニングラードとなって久しいが、当時この地ではいったい何が起こったのだろうか。このことは、久しく書くことも語ることもできなかった。一九八〇年代後半のペレストロイカ期にはじめて、地域の過去についての禁が解かれて、それまで「秘」印を付されていたアーカイヴ資料が研究者の手に届くようになった。カリーニングラードの人びとは自分たちの暮らす地域、この小さな故郷の過去をはじめてみずからのために開放し始めた。この開放には、ひとかたならぬ強い情緒的困難が伴った……。

一九九〇年代初頭、カリーニングラードの街中に最初のドイツ人旅行者の姿が見られるようになったが、彼らはおよそ旅行好きや異国情緒好きのようには見えなかった。年配で、なかには悲しげな目をした相当の高齢者もいた。単身ないし小さなグループで、街区をひとつひとつ途方に暮れたように物静かにさまよい、永遠に消え去った過去の痕跡を見つけようとしているようでもあり、あるいはずっと以前に通り過ぎた日々の光景をせめて記憶のなかに蘇らせようとしているかのようでもあった。わずかに、ごくわずかだが、幸運の女神が微笑むこともあった。かつて生を受けて幸福な日々を過ごした家を見つ

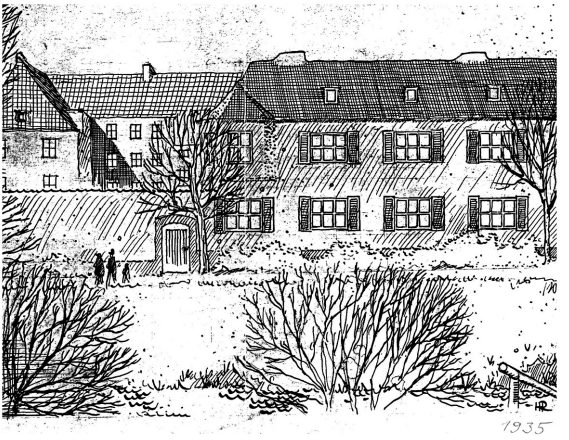
けたのだ。あるいはそんな気がしただけだったのかもしれない。おずおずとドアをノックしたり、呼び鈴を鳴らしたりして、扉が開くと通訳を介して、下手なロシア語で、あるいは身振り手振りで、かつて半世紀ほど前に自分たちはここに住んでいたので、生家の建物を見せていただきたいだけなのですが、と説明した。

あるとき本書の著者のアパートの扉で呼び鈴が鳴った。入り口には、白髪で地味な服装の背の低い年配の女性が立っていた。ずいぶんどぎまぎしていて、ドイツ語・英語・ロシア語をまぜて、これは「私の家（マイン・ハウス）」で一二歳の時にここを立ち去ったのだと説明し、なかに入ってもよいかと許しを乞うてきた。この女性は、室内に足を踏み入れると壁に手を触れ、小声でなにか囁き、幼時から記憶してきた室内の細部を思い出したかのようにときおり頷くこともあれば、頭を横に振ることもあった。きっとこんな意味だったに違いない。いやいや、私たちの時はこんなではなかった、と。通訳抜きでは会話も成り立たないから、アパートの主人（あるじ）にできることといったら、客人に愛想よく微笑みかけて、事情はわかっていますし同情していますよと、態度で示すことだけだった。時には、腰を下ろしてお茶はいかがと勧める場合もあったが、普通、返事はお断りで、これはけっして横柄なのではなく、自分が訪問したことで主人に迷惑や不安な思いをさせたくないというだけのことである。

訪問は一五分にも満たなかっただろう。辞去する際に客人は感謝の言葉を述べ、暖かく微笑んだが、目には変わらず悲しみがたたえられていた。しかし今では、この悲しみは晴れやかなものになったのではないかという気がする。

二年が経過した。あるときポストから一枚の紙片を取り出した。白黒の線画のコピーで、湖畔にある

私たちの二階建ての家であることがすぐにわかった。この街区で唯一、戦争をくぐり抜けて残った建物だったのである。この絵では建物の左側、高い塀のくぐり戸のところに三人の姿が描かれていた。女性、男性そして小さな女の子である。右下には絵を描いた人のサイン（ラテン文字のＨＲ）と、一九三五年という年代が記されていた。「ケーニヒスベルクからの挨拶状」である。この言葉は伝統的に、街の様子を描いた戦前の絵はがきに印刷されていたものだ……。



ケーニヒスベルクのヴェルフ湖畔，ローゼンクランツ並木道沿いの住居，1935 年．右下の 1935 の数字の上に小さく HR とある

＊

日本の読者にお届けするこの書物は、戦後、ドイツの一地方であった東プロイセンがソ連のカリーニングラード州に変貌したことをとりあげて、一九四五年から二一世紀初頭にいたるこの地域の歴史上もっとも重要な側面を扱っている。東プロイセンとロシアとの古くからの歴史的つながり、二〇世紀の二つの世界大戦の帰結、一九四五年のソ連領編入、移民の過程、ソヴィエトの移住者の日常生活、ドイツへの強制移住以前のドイツ人とロシア人との相互関係も論じている。特に重きを置いているのは、ドイツ的な歴史文化遺産にたいする新たな移住者たちの態度、記憶の政治、そし

てカリーニングラードの人びとの地域アイデンティティの形成である。

本書執筆の基礎となった史料は、中央（モスクワ）と地元（カリーニングラード）のアーカイヴに収められた文書類、雑誌・新聞、そしてオーラル・ヒストリーによる証言である。一九八八年以来、カリーニングラード大学の教師陣と学生たちは、著者の発意と指導のもとに、戦後、カリーニングラード州に来た初期の移住者たちのインタヴュー（記憶の記録化）に取り組んできた。これら古老らの生きた語りの一部は、オーラル・ヒストリーのジャンルに属する『ソヴィエト移住者の見た東プロイセン』[1]という書物として公刊され、これは三つの言語で五つの版を重ねてきた。

著者は四半世紀以上にわたってロシア・ドイツ関係史に従事し、旧東プロイセンの戦後の運命と、この地域がロシア連邦のひとつの構成部分へと変貌し統合される過程を研究してきた。本書はある意味で、多年にわたる学術研究の総決算である。この地域の実相に馴染みのない日本の読者のために特に心がけたのは、テクストをよりわかりよいものにすることとあわせて、注記や索引などを短縮し簡素化することである。日本の読者にロシアでもユニークなひとつの地方について知っていただくことで、ロシア国民と日本国民とのあいだの相互理解の発展が促進され、二国間関係における未解決の問題を解消する一助となることを著者は希望している。

ユーリー・コスチャショーフ

［付記］本書中で所蔵写真を公開する機会を与えてくださったことについて、国立カリーニングラード州文書館に感謝申し上げる。

創造された「故郷」

目　次

はじめに
現在のヨーロッパ地図／地名対照表／
現在のカリーニングラード州／ソ連構成共和国

第Ⅰ部　ケーニヒスベルクの時代

第1章　ピョートル大帝からロシア革命まで……3
第2章　ロシア革命から第二次世界大戦まで……21

第Ⅱ部　カリーニングラード州の成立

第3章　第二種立入禁止地区……41
第4章　残留ドイツ人……57
第5章　ソヴィエトの移住者たち――カリーニングラード州への大規模移住……87

第6章　スターリンのカリーニングラード州建設計画……105

第Ⅲ部　スターリニズム末期のカリーニングラード

第7章　新たな都市　新たな生活——移住者たちの日常生活……125

第8章　戦後カリーニングラード州農村の日常生活……145

第9章　ドイツ人のドイツへの強制移住……167

第10章　戦後スターリン期における「プロイセン的精神の追放」のための闘い……183

第Ⅳ部　ポスト・スターリン期のカリーニングラード

第11章　ポスト・スターリン期の記憶政治……207

第12章　ペレストロイカとその後——カリーニングラードの開放……223

結　語　遺産はいかに扱われたのか——結論に代えて……245

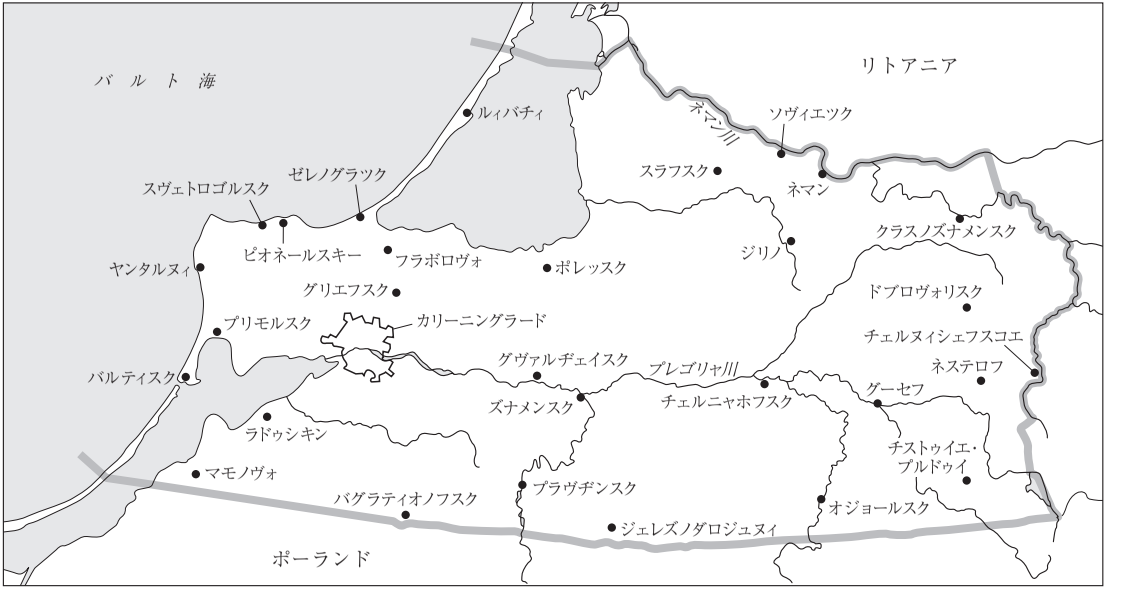
訳者あとがき……251
注
人名・事項索引
地名索引

現在のヨーロッパ地図

カリーニングラード州はリトアニアとポーランドの間に位置している

地名対照表

ロシア語名	ドイツ語名
オジョールスク（Озёрск）	ダルケーメン（Darkehmen）
カリーニングラード（Калининград）	ケーニヒスベルク（Königsberg）
グヴァルヂェイスク（Гвардейск）	タピアウ（Tapiau）
グーセフ（Гусев）	グンビンネン（Gumbinnen）
クラスノズナメンスク（Краснознаменск）	ラスデーネン（Lasdehnen）
グリエフスク（Гурьевск）	ノイハウゼン（Neuhausen）
ジェレズノダロジュヌィ（Железнодорожный）	ゲルダウエン（Gerdauen）
ジリノ（Жилино）	スチッレン／シッレン（Szillen／Schillen）
スヴェトロゴルスク（Светлогорск）	ラウシェン（Rauschen）
ズナメンスク（Знаменск）	ヴェーラウ（Vehlau）
スラフスク（Славск）	ハインリヒスヴァルデ（Heinrichswalde）
ゼレノグラツク（Зеленоградск）	クランツ（Cranz）
ソヴィエツク（Советск）	ティルジット（Tilsit）
チェルニャホフスク（Черняховск）	インステルブルク（Insterburg）
チェルヌィシェフスコエ（Чернышевское）	アイトクーネン（Eydtkuhnen）
チストゥイエ・プルドゥイ（Чистые Пруды）	トルミンゲン（Tollmingen）
ドブロヴォリスク（Добровольск）	ピルカレン（Pillkallen）
ネステロフ（Нестеров）	シュタルペーネン（Stallupönen）
ネマン（Неман）	ラグニット（Ragnit）
バグラティオノフスク（Багратионовск）	プロイセン・アイラウ（Preussisch-Eylau）
バルティスク（Балтийск）	ピッラウ（Pillau）
ピオネールスキー（Пионерский）	ノイクーレン（Neukuhren）
プラヴヂンスク（Правдинск）	フリートラント（Friedland）
フラボロヴォ（Храброво）	ポヴンデン（Powunden）
プリモルスク（Приморск）	フィシュハウゼン（Fischhausen）
ポレッスク（Полесск）	ラビアウ（Labiau）
マモノヴォ（Мамоново）	ハイリゲンバイル（Heiligenbeil）
ヤンタルヌィ（Янтарный）	パルムニケン（Palmnicken）
ラドゥシキン（Ладушкин）	ルートヴィヒスオルト（Ludwigsort）
ルィバチィ（Рыбачий）	ロッシテン（Rossitten）



現在のカリーニングラード州

太いグレーの線はカリーニングラードの国境

ソ連構成共和国

①ロシア・ソヴィエト連邦社会主義共和国　②エストニア・ソヴィエト社会主義共和国
③ラトヴィア・ソヴィエト社会主義共和国　④リトアニア・ソヴィエト社会主義共和国
⑤白ロシア・ソヴィエト社会主義共和国　⑥モルダヴィア・ソヴィエト社会主義共和国
⑦ウクライナ・ソヴィエト社会主義共和国　⑧グルジア・ソヴィエト社会主義共和国
⑨アルメニア・ソヴィエト社会主義共和国　⑩アゼルバイジャン・ソヴィエト社会主義共和国
⑪トルクメン・ソヴィエト社会主義共和国　⑫ウズベク・ソヴィエト社会主義共和国
⑬カザフ・ソヴィエト社会主義共和国　⑭タジク・ソヴィエト社会主義共和国
⑮キルギス・ソヴィエト社会主義共和国

本書に登場するロシア共和国(①)の都市

a レニングラード　b スモレンスク　c ブリャンスク　d モスクワ　e カルーガ　f クルスク　g ヤロスラヴリ　h ウラジーミル　i リャザン　j タンボフ

第Ⅰ部

ケーニヒスベルクの時代

第1章　ピョートル大帝からロシア革命まで

バルト地方におけるドイツ人の「島」

東プロイセンのユニークさは、今から八世紀前に運命的に決まったものだ。一二二六年、ポーランドのコンラト一世マゾフシェ（マゾヴィエツキ）公が、異教徒である古プロイセン人（プルシ人）の諸部族と戦うための援軍として、ドイツ騎士団（チュートン騎士団）を招き入れたのである。ドイツ皇帝、ローマ教皇、そしてヨーロッパ中のキリスト教徒の騎士の支援を受けた十字軍は五〇年かけて、異教徒の死にものぐるいの抵抗を無慈悲に蹴散らし、古プロイセン人の地を攻略した。軍門に下った土地に騎士団は城塞を築き都市を創建して、ドイツその他のヨーロッパ諸国から植民者を引きよせた。その結果、古プロイセン人の地には、みごとに組織され大規模な軍事能力を備えた強力な騎士団国家が登場した。まもなく当初の境界の内部が手狭になると、十字軍の戦士らは近隣諸族との戦いを上首尾に進めて、境界付近のポーランド人やリトアニア人の土地を自領に加えていった。時の経過とともに騎士団国家の多民族性はドイツ人による支配へと置き換えられていった。在地の人びとは根絶やしにされるかゲルマン化された。かくしてバルト海東部沿岸地域には「ドイツ人の島」が形作られた。これは、ドイツから数百キロメー

トル離れスラヴ人やバルト人に包囲された西の文明とは多くの点で縁もゆかりもない世界であった。「ドイツ人の島」のおかれたそのような状況には正負両面があった。[ザーバド*1]

騎士団国家とその末裔である東プロイセンは一面では、使節団つまり東方へのドイツ的影響の水先案内人の役割を果たして、ヨーロッパのこの一隅に新しい進歩的息吹を伝播する者とならねばならなかった。たとえば、一五四四年に創建されたケーニヒスベルク大学がバルト諸国の学問と啓蒙の発展に際して果たした役割は、そのようなものであった。他方、「島」という立場は、少なからぬ危険を内に秘めていた。隣接するポーランド・リトアニアの野心的な統治者たちが力を蓄えるや、かつての失地を取り戻して歴史的正義を回復することを目標に、ドイツの飛び地を拡張の対象として見なすことが多くなった。

ポーランドとの一連の戦争をへて一四六六年に騎士団は降伏を余儀なくされ、十字軍戦士は多くの土地を失い、それらはポーランド王権の手に渡った。縮小した騎士団国家はポーランド王の封臣になった。一五二五年、最後の大総長アルブレヒト・フォン・ブランデンブルクのもとで騎士団国家は世俗国家で

図1　騎士団国家の最大版図（1407年）

あるプロイセン公国に転じ、後にプロイセン王国の一部となった。この新王国はポーランド領によって分断された二つの部分からなっていた。王国を治めるホーエンツォレルン家が主に目指したのは、この国家の本土部分（ブランデンブルク）を東プロイセンつまりかつての騎士団領と陸続きにすることである。

「ポーランドという間隙」を解消する事業を決意したのは、プロイセン王のフリードリヒ二世（大王、在位一七四〇―八六年）である。政治的遺言のなかで王は、国家にとって最大の問題は、国内他地域から分断されてロシアに攻撃される可能性のある東プロイセンの無防備さだと書いた。この危惧は七年戦争時に完全に裏づけられた。四年間（一七五八―六二年）にわたって東プロイセンはロシア軍占領下に置かれて、ロシア人総督の手で治められたのだ。それにもかかわらず両国の軍事紛争は首尾よく和平にこぎつけて、プロイセンとロシアの接近にとどまらず同盟関係樹立のための条件を生んだ。

フリードリヒ二世の統一構想は、オーストリアやロシアも加わった一八世紀後半の三次に及ぶポーランド分割を通じて実現された（一七七二年、一七九三年、一七九五年）。ヨーロッパ地図からポーランドが消滅した結果、プロイセンは国土を二倍に拡大して大国となったが、特に重要なのは、分断されてきた国土の二つの部分の再結合が進展したことである。この時、東プロイセンは、ロシアと国境を接するプロイセンの一地方となった。

東プロイセンの孤立状態という問題はうまく解決されたとはいえ、たちまち、またもや深刻な試練にみまわれた。ヨーロッパはナポレオン戦争による嵐の時代に突入したのだ。一八〇六年にフランスはプロイセン軍を殲滅（せんめつ）して、国全体を占領するのに成功した。同盟国の援護に駆けつけたロシア軍も役には立たなかった。ナポレオンはまたもや完勝した。一八〇七年にティルジットで行われた和平交渉でフラ

ンス皇帝は、ロシアのツァーリであるアレクサンドル一世にプロイセン全土をロシアに引き渡すと申し出た。ロシアとプロイセンとの同盟関係を断ち切ることを狙ったのである。ツァーリの名誉のためにいうと、彼は、プロイセン国王フリードリヒ三世に与えた永遠の友情の誓いを裏切ることなくこの申し出を退け、東プロイセンをホーエンツォレルン家の王国の構成部分のままにするよう主張した。ナポレオン戦争の終結後、ロシアとプロイセンの国境では百年に及ぶ堅固な平和が確立され、ロシアにとって東プロイセンはもっとも近くにあるドイツ領にとどまらず、一風変わった西方世界の「ショーウインドー」になったのだ。

ケーニヒスベルクのピョートル一世

一六九七年春、ロシアのツァーリで二五歳のピョートル一世は大使節団の一員として、はじめて国外に旅立った。これは、モスクワ国家[*2]史上初めてのロシア君主によるヨーロッパ歴訪であり、期間は一年半に及び、まぎれもなく物議を醸した。これまでロシアの人びとのあいだには、ルーシ〔ロシアの古名〕の境界外には「犬の頭をした人間」が暮らしているとか、西は罪悪と異端の根源であり、どんな形であれ彼らと接触するのは危険だといった強い偏見が存在していた。何世紀にも及ぶこのステレオタイプは消滅する定めだった。

ツァーリはお忍びで（ピョートル・ミハイロフという名の普通の貴族に身をやつして）旅したが、秘密を守るのは土台無理な話で、いたるところで王侯による歓待に迎えられた。旅路の最初にほぼ二カ月もの長いあいだ、ピョートル一世はケーニヒスベルクで足止めされたが、そこでは城塞建築について知識を得、

海事を研究し、砲術を学んで、「慎重にして巧み、しかも豪胆な射撃の名手」[1]というお墨つきも手に入れた。特に大きな印象を受けたのは当地の大学を訪問したことだった。この時から、自国にもこの種の施設を設けようと思いついたのだ。歓迎儀礼や外交交渉のほかに、ツァーリは気晴らしに興じ、闘獣競技や宴会の場を訪れ、狩りにいそしみ、当時流行の花火の場にも席を連ねた。

東プロイセンを後にしたツァーリはヨーロッパの多くの国を訪れたが、西との最初の出会いはほかならぬケーニヒスベルクであったし、最初の印象がもっとも鮮明だというのは世の常である。その後、ピョートル一世が五回もこの都市に立ち戻ったのは偶然ではない。一六九七―九八年の外国旅行が若きツァーリを壮大な改革に駆り立て、そのことがロシアをヨーロッパ的な発展軌道に導いたとする点で、歴史家の意見は一致している。彼は、死刑で脅して外国訪問を禁ずる法令を廃止したのにとどまらず、自身、臣下に外遊を強要した。ツァーリが若い貴族を修行のために外国に送り出さない日はまずないと、ロシア宮廷に滞在する異国の外交官は書き記していた。見送りには涙がつきものだった。多くは妻を娶り子もいたし、外国語を解する者はほとんどいなかったからである。だが、君主の意に背くほど肝の据わったものはほとんどおらず、拒むとツァーリが土地財産を没収すると脅しをかけてきた。在位中に数千人の若者が「海をわたって」勉強に赴いた。その際いずこよりも重要だったのが、ロシア国境に至近のケーニヒスベルク大学である。

ことは貴族には限らない。一七一六年、ツァーリは全国から三〇―四〇人、平民出身で勉学の能力を備えた若者を選抜して、国費でケーニヒスベルクに派遣するように命じた。外国語を身につけて、ヨーロッパ的教養を得られるようにするためである。

若者らは各地の都市や県ごとに集められて、翌年やっとケーニヒスベルクに旅立ち、勉強に取りかかった。半数はすぐに大学の正規学生として登録されたが、それ以外はラテン語もドイツ語も解さないため、私教師を雇うほかはなかった。手初めに外国語を学ぶためである。ピョートル一世直々の思し召しで学生の監視を引き受けたケーニヒスベルク市長のネゲラインは、学生たちの怠けぶりや気晴らしのそぞろ歩きについてツァーリに不満を告げていた。彼の言葉を借りると、ロシア人の若者はロシアの祝日もドイツの祝日も欠かさず休むうえ、授業には不定期にしか出席せず、さまざまの過ちや悪行で罰金を科され、逮捕されることも一度や二度ではなかった。学生側でも、手元の不如意や並大抵ではない勉学の負担、訳のわからぬ講義、ドイツ人の不公平な態度その他の困りごとをペテルブルグに書き送った。同時に、できるだけ多く知識を得られるよう外国滞在期間の延長をツァーリに願い出るロシア人学生がいたのは興味深い。

一七二〇年、三年以上外国で学んだピョートルの使節がペテルブルグに戻った。彼らの勉強の出来栄えはそれほど悪くなかったようだ。故国に戻った二九人の学生のうち、元老院（セナート）で行われた試験で不合格は一人のみだった。彼らはみな、ツァーリが設けたばかりのロシアの新統治機構である外務参議会や海軍参議会で勤務するよう採用され、ベルリン・イギリス・オランダ・デンマーク・ポーランドに駐在するロシア外交使節の通詞や秘書職にも任じられた。[2]

亡くなる直前にピョートル一世は、サンクト・ペテルブルグに科学アカデミーを創設する案を裁可したが、これは学術機関と大学を併設したものになるはずだった。ピョートルの創意は、同時代人からは夢物語のように受けとめられた。国内ではアカデミーの学者も、大学生も見つからないからである。反

対意見に応える際にツァーリが引き合いに出したのは、まだうまく水を引けないとわかっていながら水車小屋を建てた老人の寓話である。水車小屋を建てておけば、息子らが水路を掘って水を引くだろうと、望みをかけたのである[3]。だが当初は、教授も学生も外国から呼び寄せ可能だった。サンクト・ペテルブルグのアカデミー創設にもっとも積極的に関与したのは東プロイセン出身の教授たちで、初代から数えて五人の総裁のうち四人までがケーニヒスベルク大学で教育を受けていた。

ピョートル時代以来、ケーニヒスベルクはロシアの啓蒙に重要な役割を果たした。二〇〇年間に何千人ものロシア出身学生が当地で教育を受けた。卒業生には名をあげたロシア人も少なくない。著名な学者、医師、アカデミー会員、モスクワ大学教授、国家顕官や公の場で活躍した人びと、県知事や元老院議員、さらに将校や文学者などである。

「ロシア人」の港ケーニヒスベルク

一九世紀、ドイツはロシアの主要な経済パートナーとなった。東プロイセンは二国間協力から少なからぬ利益を得た。ケーニヒスベルクは、なかば本気で「ロシア人の港」と呼ばれるようになった。ロシア産商品が取扱総量の約四分の三を占め、ここから海路で輸出された。一八八〇年、ロシア領事のフリードリヒ・ヴィシェメルスキーは、ケーニヒスベルクの繁栄は隣国に決定的に依存しているとして、こう書いた。

今年も経験したことだが、ロシアで不作があると当地のすべてがほぼ止まってしまう。当地の港の

交易活動は、まったく取るに足りない水準まで落ち込んでしまった。[4]

ロシアからの主要輸出品は穀物で、品質もよくドイツ産以上という評価だった。ケーニヒスベルクではロシア産農業原料が補完的に精製・選別・箱詰めされ、大半がさらに西ヨーロッパに転送された。当地の鉄道では、ロシアからの貨物を積んだ貨車が一日当たり四〇〇―五〇〇両を超えた。両国の国境駅には、ロシアの線路(広軌)用からドイツの線路(標準軌)用に貨車の置換えを行う特別装置が備えられていた。さらに、東プロイセンでは河川を使って大量のロシア産木材が筏(いかだ)で輸送されていて、年間約一〇〇万立方メートルに達していた(図2)。これらの木材は、ケーニヒスベルクで活況を呈した建設現場に届けられたものであり、外交官の報告によると、旧要塞の城壁が取り払われた場所に、巨大な建物が建設されていた。ティルジットからメーメルにいたるネマン川沿いに建てられた三一軒の木材加工工場も、ロシア産木材を使って作業を行っていた。[5]

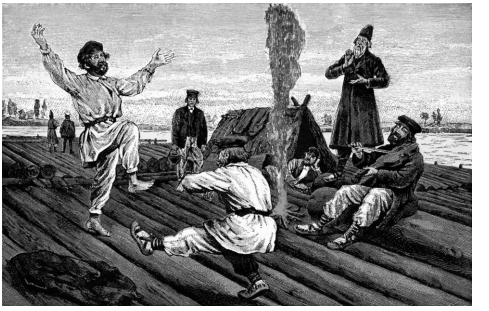


図2　ティルジット近郊のネマン(メーメル)川のロシア人筏乗り(19世紀末のドイツの絵はがき)

他方、ロシア人の商人・地主・工場主は東プロイセンで、種畜、最高品質の種子、農機具を好んで購入した。地元造船工場の経営者は、ツァーリの海軍の半分は東プロイセンの造船所で建造されたのだと、誇らしげに語った。機械、プラント、人工肥料、塩等々といったロシア側の輸入品の中継地点としてケ